宇田川準一譯 小學讀本 二

洋学文庫
文庫8
B 76
2

宇田川準一譯
小笠原東陽校

小學讀本

巻二

文學社刊行

39-8123

小學讀本巻之二

宇田川準一 譯
小笠原東陽 校

第三課

第一

この女兒は、文字を讀み得るや、○彼は、書物を讀み得るや、○然り、彼は、或る書物を讀むことを得、○汝は、彼の、書物を

看る狀を見るや、○吾は、今、これを見るなり、

第二

これハ、老人なり、○彼の頭も禿て、髭は白し、○彼は、机の前に坐りて、手に、筆を持てり、○彼ハ、甚だ善き人なり、

第三

此二匹の馬は、今、走れりや、○汝は、彼馬の、速く走るを見るや、○彼馬は、速く走らんとするや、○彼馬を引き止めんとする人を見よ、○此人は、綱を強く引きて、彼馬を、甚だ速く、走らしめざるべし、

第四

この憐むべき老人を助けよ、○彼を抱き上げて杖に倚らしめよ、○彼をして轉び倒れしむべからず、○此の如き老人には萬事親切を盡すべし、○人は皆老年に及べば自由に歩行すること能はざれば

なり、

第五

汝は、この小兒を見るや、○汝は、彼の顔を、見得るや、○汝は、彼の頭髪の、頸の所に、長く垂るゝを見たりや、○これは、善き小兒なるゆゑ、我は、その生長して、善良の人と成ること

を望むなり、

第六

これハ、犬を、飼ひ畜へる、童子なり、○この犬は、彼を、嚙ミ傷くることなし、○汝は、彼の、犬を伴ひ行くを見たりや、○これハ、善き犬なり、○善き犬は、汝を嚙まざるべし、

第七

汝は、此積荷に乗りたる我を、見得るや、○我は、積荷に乗りて、居れり、○此積荷ハ、乾草なりや○否乾草にあらず、○我は、これに乗りて、小屋の所に至るべし、○我は、轉げ落

ちざる様に、心を用ひて、この上に、居らざるべからず、○汝、馬速く歩まずして、徐に行くべし、

第八

それハ、何なりや、○これは、鳥の巣なり、○汝ハ、その中に、何のあるを見るや、○我ハ、四ッの卵を見たり、○吾に其卵を見せよ、○其卵は、美しきや、○其巣は、軟に

して、温なりや、○我等ハ、其卵を取りて、可なりや、○否、我等は、これを取るべからず、鳥は、卵を取らるゝことを、好まざればなり、○若し、これを取らずして、巣の中に置くときハ、親鳥來りて、其上に坐り、之を暖めて、終に、雛を孵

そものなり、

第九

この少年ハ、休まずして、終日、歩むこと能はず、○彼ハ、長く歩ミたるゆゑ、今、岩に腰を掛けて、憩へるなり、○然れども此處に長く留まるべからず、彼の家ハ、此處より遠く隔り、且つ日暮になりぬれバなり、○汝は、少年の憩へる、岩の側らに在る、池を見たりや、○この池には、數多の魚、游ぎ居れり、然れども、この少年ハ、これを漁る爲めに、留まること能ハざるなり、

第十

この女子ハ、左の手に何を持てりや、○

汝は、その名を知れりや、○それハ鏡なり、○彼ハ、何故に、それを眼むるや、○彼ハ、頭に、何を着けるや、○彼ハ、無益の飾を好めりや、○この女子ハ、手に箱を持てり、○この箱は、何にて造れりや、○この箱の中に在るハ、何なるや、○彼ハ、頭に、何を冠れりや、○彼の手に持ちたるハ、この頭巾の、箱なりや、○否、彼ハ、この箱の中に、新しき頭巾を入れたり、○彼ハ、今、新しき頭巾を買ひて、家に持ち帰りたるなり、

第十一

爰に四匹の鼷と、一匹の鼠と、一人の童

子と、一匹の犬と、一匹の猫とあり、○汝ハ、鼷と、通常の鼠との異なる所を、吾に、示すことを得るや、○鼷ハ、甚だ小なれ

ども、通常の鼠は、之より大にして、長き尾あり、○四匹の鼷ハ、今何を為せりや、○三匹は、床の上に居り、一匹は、箱に上りて、

遊べり、○猫ハ、箱に上りたる鼷を捕へんと思ひ、又大なる鼠は、穴に入らんとせり、○汝も、鼠の穴を見得るや、○鼠は、此穴の中に、巣を造りて、住めりや、○此穴の中は、暗きや、○甚だ暗し、然れども、鼠は、暗き所に於て、能く物を見ることを得るなり、

第十二

汝ハ、この牛の、荷車を牽くを、見さりや、
○吾ハ、これを見さり、○此人ハ、何故ふ、

一匹の牛をして、車を牽かしむるや、○彼は、何故ふ二匹の牛に、車を牽かしめざるや、○此人ハ、貧くして、唯一匹の牛をのみ持てバなり、○牛は元來力あるものなれば、一匹までも、重き荷物を牽くことを得るなり、○この牛の、頸ふ掛けさるものは、何なりや、○それハ、軛（クビキ）なり、○此人の、鞭を持てるハ、何の爲めなりや、○牛の歩まざるとき、これを撻ちて、行かしむる爲めなり、

第十三

汝は、左ま立ちたる老人を、如何ふる人

と思ふや、○善き人あり
と思ふや、惡き人ありと
思ふや、○吾ハ、彼の顔の、
柔和なるに由りて、必ず、
善き人なることを、知れり、○此老人ハ、
二人に向ひて、如何なることを、語まとる
や、○彼ハ、二人に向ひて、人の幸福を得
るは、皆、品行を正しくして職業を勉強を

るに、因ることとの道理を話せるなり、
爰に、又、二人あり、○この二人は、前の老
人と、異なりて、善き人に、
あらざるべし、何となれ
バ、其顔色甚ダ惡しけれバ
なり、○汝も、心を用ひて、
此の如き人を避け、決して相交はるべ
からず、

第十四

汝、人形、坐れ、○汝の手を、兩方に伸ばし、足を、前に伸ばして、動かすべからず、○若し、動くときハ、汝の姿を、畫くこと能ハず、○吾は、今、汝の姿を、寫し取りたり、○汝は、次に、兩腕を下げて、手を、前垂の上に、置くべし、○吾は、再び、其姿を、寫し取るなり、○畫き終るとき、汝、手足を、自由に動かすことを、得べし、

第十五

汝ハ、歩みて、此處に來ることを、得るや、○汝は、行かんと思へバ、吾の手に賴りて、徐に歩むべし、○次第に歩

み馴れて、倒れざるに至れバ、走り行くことを得るなり、○汝は未だ速く歩むこと能ハざるゆゑ、蹶き倒れて、傷を受けざる様よ、心を用ふべし、○決して、吾の手を離れて、遠く行くべからず、

第十六

爰よ不具なる三人の少年あり、○車よ乗りたる少年は、物を見、又物を聞くことを得れども、其膝行よして、立ちて歩むこと能はず、○車を挽ける少年は、物を見、又、歩むことを、得れども、聾にして、物を聞くこと、能はず、○車を推せる少年ハ、物を聞き、又歩むことを得れども、盲よして、物を見る

こと能はぞ、○然れども、左ふ立ちたる女兒も、物を見、物を聞き、又、歩むことを得て、更よ不自由なることなし、○凡そ、人と交はるの際、不具のものに、逢ふときハ、務めて、親切を盡をべきものなり、決して、之を、指し笑ふべからず、

第十七

爰に、馬よ乗れる二人あり○其一人は、

砂を蹴て、馬を走らせ、他の一人も、馬を駐めて、瞰め居れり、○彼ハ、何故ふ、馬を走らせざるや、○一人の馬を走らせる哉見んが爲めなり、この馬よ乗りて、走れるは、

前の一人なり、○其走ること、甚だ速けれども彼ハ、恐れざるなり、○汝は、彼の、速く走れるは、何の爲めなるを、知れりや、○吾ハ、これを知らざるなり、

これも亦前の人にして、今、馬より落ちたる所なり、○彼ハ傷を受けたり

や、○彼ハ、全く死したりや、○否死したるにて、非ざれども、一時氣絶したるなり、

第四課

第一

それハ、新しき書物なりや、○これハ、新しき美麗なる書物なり、○その書物は、吾に讀むことを、得べきや、○汝ハ、此書

物を讀み了れバ、その中に、記載したることを、吾に語ることを得べし、○凡て、書物を持つときハ、汚し、或ハ、破らざる様に心を用ひて、扱ふべし、

第二

我等は昨日造りたる小舟を持ち、河濱

に至りて、遊ばんと思ふ、○河濱に行きても決して、河の中央に至ることなかれ、○汝の衣服は濕ひたり速く岸に上りて乾かすべし、○吾の立つ所ハ、淺くして、衣服の濕れることなく、又沈み溺れる、患なし、○吾ハ、今この小

舟を浮ぶる故に、其疾く走るを見るべし、

第三

此童子は、新しき紙鳶を持てり、○其糸を持ちて、彼の走るを、見よ、○彼ハ、高く紙鳶を飛ばすことを得、○紙鳶の颺るを見よ、○

紙鳶ハ、空に、高く颺りたり、○此時、よく心を用ひざれバ、其糸の、樹に繫ることあるべし、

第四

此童子を、見よ、○彼ハ、新しき帽子を、持てり、○彼の、舊き帽子ハ、損じたる故に、新しき帽子を、買ふことを、樂めり、○新しき帽子を買ひ得されバ、損じ、又ハ、濕

さゞる様に、能く、心を用ふべし、○爰に、又、一人の童子あり、○彼ハ、其體高くして、長き上

衣を、着たり、○此童子も、亦、新しき帽子を買はんと、思へり、

第五

此猫を見よ、○此猫ハ、褥床の上に、坐せ

る故に、善き猫にあらず、○汝も、此猫を、追ひ退くることを、得べきや、○猫も、吾の手を出すを見れバ、噛みつくべし、○此猫は、他所に、行くや、又、此室内に、留まるや、○猫は、此室内に留まれども、褥床の上に、居らしむべからず、○汝は、此猫の、鼠を捕ふるを、見たりや、○

吾を、見たり、然れども、それハ、大なる鼠には、あらざりし、

第六

汝は、小舟に乘れる人を見たりや、○彼は、其舟を、如何して、行かしむるや、○彼は、手に櫂を持ちて、これを漕げり、○此小舟の浮べる所ハ、湖水なり、○此湖水には、數多の魚類あれども、皆甚だ深き處に、游泳する故、其魚を見ること能はず、

第七

汝ハ、數名の童子の、遊ぶを見たりや、○彼等ハ、何を以て、遊べるや、○彼等ハ、球を以て、遊べり、○彼等の、球を蹴るを、見

たりや、○吾は、球を蹴るを、見ざれども、棒を以て、球を撃つを見たり、○此ハ、堅き球なりや、○否、軟き球なる故、體に當ることあるも、傷つくることなし、○此は、童子に、善き遊なれども、終日、これを爲すべからず、

殊に、熱き日には、成るたけ速く、これを止むべし、若し久しく、これを爲せば暑さの爲めに、身體を害ふことあればなり、

第八

大陽昇りたり、これ我等の、起き出づべき時なり、○大陽の、昇りたる後も、褥床に在るべからず、○我等は、今、大陽を見

得れども、其昇るを見ざりし、○汝は、大陽の甚く赤きを見たりや、○大陽の、甚だ赤きときは、雨ふるべきや、又、旱すべきや、○此の如きときハ、大概、旱すると、知るべし、

第九

これは、何の樹なりや、○これは、薔薇の樹なり、○汝は、其蕾を見たりや、○此樹には、數多の、紅き蕾著けり、○此蕾ハ、撮ミ取りて、可なりや、○否、今、これを撮ミ取るべからじ、○二三日の間、樹に着け置くとき

は、其蕾開きて、美しき、紅き花となる、○此時に、これを撮み取りて、可なり、

第十

汝は、此鳥を見たりや、○此鳥は、馴れたる故、吾の手より、餌を食ふなり、○此鳥は、梨の樹に、巣を造れり、○汝は、其巣を見ることを得るや、

○其中に、四つの卵あり、○我等は、其卵を、巣より、取り出すべからず、

第十一

此女子は、雞に、餌を與ふる爲めに、爰に來れり、○汝は、老たる牝雞の、速く食ふを、見たりや、○他の小鳥は、牝雞の如く、速く食ひ得るや、○否、牝雞の如く、

速く食ひ、又多く食ふこと能ハど、○牝雞は、何を食ふや、○牝雞ハ、穀物を食ふなり、

第十二

此女子は、鳥を籠に入れて、養ひ置けり、○此鳥は、何なりや、○これハ、鶯なり、○此鳥は、馴きさりや、又、暴れて、逃げ去らんとするや、○此鳥は、今、よく馴れたれども、初めハ常に、逃げ去らんとしたり、

第十三

此鳥の、囀くときハ、如何なる聲を出ざす(?)や、○此鳥は、快よき聲を出して、囀くあり、○汝は、其聲を聞くことを、好むや、○吾ハ、其聲を聞くことを好み、又、其姿を

見ることを好めり、○若し、籠を開くとも、鳥は、尚ほ、其中に居るや、又、飛び出だすべきや、○馴れさる鳥なれバ、一度籠より出で、他に行くとも、再び、歸り來るべし、然るに、暴き鳥なれバ、直きに、遠く飛び去りて、復歸り來ることなし、

第十四

爰に、大なる犬と、多くの小き犬とあり、○見よ、頸に環を嵌めさる、大なる犬は、其顔甚だ柔和なり、○此犬ハ、親切にして、小犬を嚙むことなき故、小犬は、皆、こ

れと戯れ遊ぶなり、童子にも亦、親切にして、善きものと狡猾にして、悪しきものとあり、○吾ハ、悪しき童子等を、好まざる故成るたけ、彼等を遠ざけんとハ、○假令悪しき童にても、之を憎み、傷つくることなく、唯、彼等と共に、遊バざるべし、

第十五

此童子ハ、此女兒に、親切なりや、○然り、此童子ハ、親切なるゆゑ、女兒の、跌き倒れざる様に、其手を執りて、導けり、○彼

等は、路に迷ふべきや、○否、童子は、路を知る故、共に、迷ハざるべし、○彼等は、森の中に、在ることを、恐るゝや、○否、恐れざる

なり、○此女兒は、童子を信じ、又、童子は、よく路を知りて、女兒を導く故、彼等ハ、家に居る如く安全なるべし、○彼等は、家に、歸らんと思へバ、直きに歸ることを得るなり、

第十六

汝は、手に杖を持ちたる老人を見たりや、○彼老人ハ、何ゆゑに、杖を用ふるや、

○杖に倚れバ、歩み易き故なり、○彼ハ、路傍の岩の上に、腰を掛けて、杖の上に、手を休めたり、○彼の顔色と、白き髪と、其腰の屈みたるとは、年老たる徵なり、○汝は、歩む爲めに、杖を要するや、○否我ハ、稚きゆゑ、これを要せざるなり、○彼老人ハ、何故に、其

處に、腰を掛くるや、○憩ハんが、爲めなり、○彼を、起つことを得、又、歩むことを得るや、○然り、彼は、起ちて歩むことを得れども、速く行くこと能ハず、

第十七

汝、此二人の、持ちたるものは、何に用ひるかを、知るや、○汝は、其名を知れ

りや、○それハ、喇叭なりや、○これハ、喇叭の種類にして、これを吹けバ、遠く隔りたる處にても、聞くことを得べき、大なる音響を發する道具なり、

爰に、又、四人あり、○汝は、此人等を老人なりと、思ふや、○此人等は、前の圖の、杖を持ちたる、老人の

如く、年老たりや、○此四人の中、帽を冠りたる人の、兩手を見よ、○汝は、彼を善き人なりと、思ふや、○否、吾ハ、惡き人なりと思ふなり、

第十八

此人ハ、長き白髮を戴けるに由りて、老人なるべし、○其顔の柔和なるを見よ、○吾は、此の如き顔を好めり、○此人は、

又必ず、善き人にして、決して、虚言をすることなかるべし、○汝は、彼の膝の上に、

在るものを書物なりと思ふや、○否それハ、巻物なり、○汝ハ、彼ハ、何を見ると思ふや、○巻物を見ると思ふ、○汝は、巻物の外に、何を見るや、○吾は、硯と筆とを、見る、○彼ハ、筆を

持ち、巻物に、字を書きて後書物を讀むが如くに、これを讀むことを得るなり、○善き老人よ、我等が總て問ふ所の事を教ふるや、○彼は、童子を好めりや、○○然り、彼ハ、善き童子を好みて、能く、これに教ふれども、惡しき童子を好まざるなり、

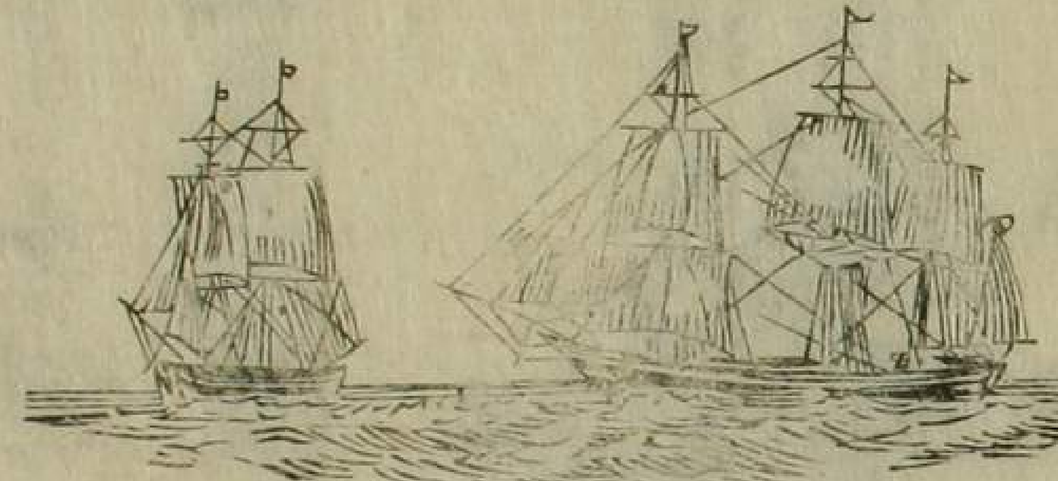
第十九

汝ハ、此小女を見たりや、○彼は、何故に、兩手を伸して、上げたるや、○彼ハ、籠に入れさる鳥を貰ひされども、善く心を用ひて、これを養ハざる故、其鳥は、籠の開くとき直きに、逃げ出して、森の中に、飛び去れり、○此時、兩手を伸して、上ぐるとも、其鳥を、捕ふ

ること、能はず、○吾は、其鳥の、逃げさるを喜べり、元來鳥は、自由を好むものにして、籠の中に入れ置くべき道理なければなり、○鳥は、大抵樹木の中に在ることを好み、其處に、巣を造りて、其雛を、孵すものなり、

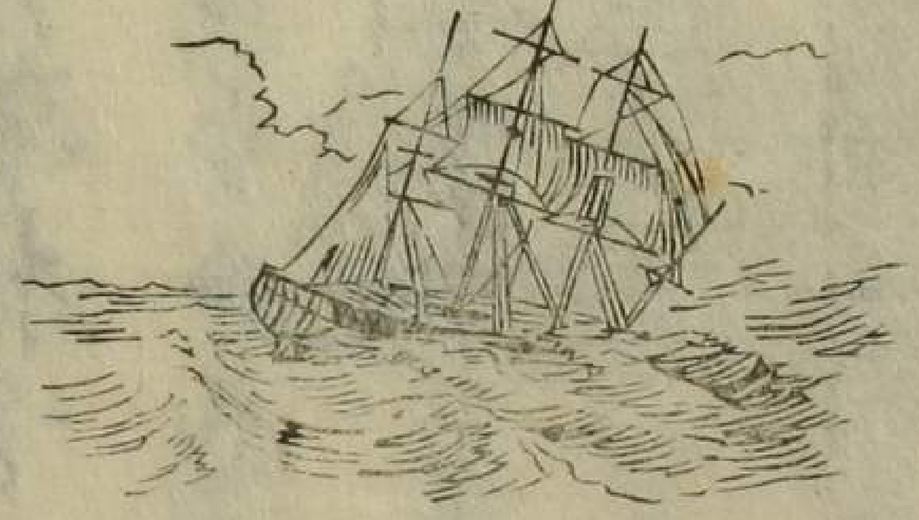
第二十

爰に、二艘の船あり、○其一つには、二本の檣ありて、一つには、三本の檣あり、○汝は、檣と、其頂上に飜る旗を見さりや、



○汝は、此二艘の中、何れに乘りて、海上を航ることを好めるや、○我ハ、風の吹き、浪の高く起つときにハ、船に乘りて海上に浮ぶことを好まずして、陸に在る

ことを好めり、見よ、又爰に、暴風の時、海上に浮べる船



あり、○船中の人は、甚ざ難儀なるべし、○元來大船に、數日、又は、數週間、陸を見ること能はざるほど、遠く隔りたる海上を、航るものなり、

小學讀本卷之二　終

明治十五年五月廿九日版權免許
同　　年九月出版

纂譯人
東京府士族
宇田川準一
東京西小川町二丁目七番地

出版
三重熊本根室縣御用書肆
文學社
東京本町四丁目十六番地

見本